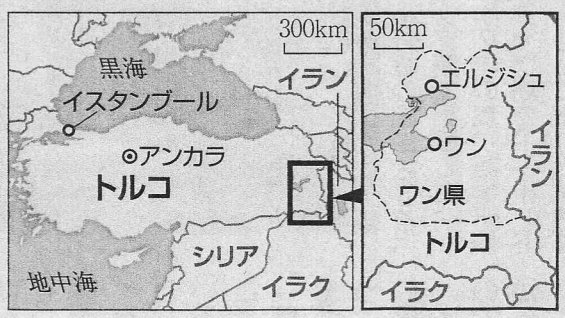
24日、トルコ東部ワン県エルジシュで、倒壊した建物から救出した女児を抱え、救急車へ急ぐ隊員（ロイター）

# トルコ地震 死者260人超す

## アパート次々倒壊

## 「家族10人、中に」

【エルジシュ（トルコ東部）＝三好範英】トルコ東部ワン県で23日発生したマグニチュード（M）7・2の地震で、AFP通信によると、24日午後（日本時間同夜）までに県都ワンやエルジシュで死亡した人は264人、負傷者は約1300人になった。今後、周辺地域の被害状況が判明するにつれ、犠牲者がさらに増える恐れがある。＜AMDA現地へ出発38面＞




【エルジシュ（トルコ東部）＝三好範英】大地震の直撃を受けたトルコ東部のエルジシュ市に24日入った。崩壊したビルから死者が発見されるたびに家族の悲痛な叫び声が響く。同市だけで、196人が死亡した。トルコの各地から結集した救援隊2000人が中心となり、懸命の救出作業が続いている。

「携帯電話で救出を求めてきた人がいる。この下にまだ生存者がいるはずだ」

現場で救援活動にあたる女性緊急救援隊員がそう言って、焦りの表情を見せた。

市役所や商店が並ぶ中心街では、コンクリート製の5階建てアパートがぺしゃりとつぶれていた。その並びの2軒のビルも大きく傾き、壁が崩落してソファなどの家具がむき出しになっている。つぶれたコンクリートの壁の隙間からは、カーテンや衣類が見えた。

ショベルカーなど重機も使ってがれきを取り除き、オレンジ色の制服の救援隊員が折れ曲がった柱の間から中をうかがう。しかし、届くのは悲報ばかりだ。

「赤ん坊の遺体が見つかった」。救援隊の1人が押し殺したような声を上げた。やがて黒いコートにくるまれた小さな遺体が救急車に運び込まれていった。祖父とみられる初老の男が頭をかかえ号泣した。救援隊のメフメト・タシュデミルさん(41)は「隣に母親の遺体がある。授乳中だったようだ」と唇をかんだ。アパートの住人、イルマス・バイランさん(19)は「すぐ近くのカフェにいた。大きな揺れと同時に3軒の並びのアパートが次々と倒れていった。1階店舗の入り口にいた住人は逃げられたが、その他の人は無理だった」と泣きはらした目で語った。隣のアパートの住人セラハティン・チフチさん(73)も「まだ妻をはじめ、家族10人が閉じ込められている。15年前に建てられたアパートだが、しっかりした建物だったのに」と話し、ぼう然と座り込んだ。

# 「トルコに恩返しを」

## 大地震 NGO支援の動き

トルコ東部で23日に発生した大地震。死者は200人以上に及ぶ。在日トルコ大使館には支援の申し出が相次ぎ、トルコの都市と姉妹提携を結んでいる自治体も義援金を送る準備を始めるなど、支援の動きが広がっている。<本文記事1面>

東京都渋谷区のトルコ大使館には24日、「物資を送りたい」「東日本大震災で支援を受けたお返しをしたい」などの問い合わせが相次いだ。同大使館は「まだ受け入れ態勢が整っていないが、申し出に感謝したい」という。

1890年に和歌山県沖で難破した軍艦「エルトゥールル号」の乗組員を救出した縁でトルコと交流が続く同県串本町は24日、在日トルコ大使館にお見舞いの電報を送り、町役場など3か所に義援金箱を設置した。20人以上のトルコ人留学生をホームステイで迎え入れてきた同町トルコ文化協会の丸石恵子代表は「各地に知り合いがおり、安否が気がかり」と心配する。

トルコ西部のヤロバ市と友好姉妹都市となっている富山県砺波市も被害情報を集めており、義援金箱の設置などを検討している。

一方、国際医療NGO「AMDA（アムダ）」（本部・岡山市）の医師ら3人は24日、現地に向けて出発した。3人は福岡市の渕崎祐一さん(67)と神戸市の大類隼人さん(30)の2医師と、現地での調整にあたるトルコ国籍で大阪府在住のイュルディス・アフメットさん(23)。両医師は同日夕、JR岡山駅で新幹線に乗り込み、同夜、関西空港でイュルディスさんとともに、イスタンブールへ向かう。大類さんは「発生から時間がたっておらず、がれきの下に埋もれた人がいるかもしれない」と救出への思いを語った。